

1999年、日本放射線技術学会の短期留学制度を利用して「シカゴ大学カートロスマン放射線像研究所」に3か月間滞在し、様々なことを勉強した。その当時先輩に言われたことは、「3か月では具体的な実績を示す時間もないし、日米の違いや研究への取り組み方を感じて来たら良い」ということであった。あれから14年、あまり進歩していない私は新しい発見を求めて今回の研修に参加させていただいたが、何よりも驚いたこと(感激したこと)は、参加した方々の意識の高さと熱意に圧倒されたことである。彼らの知識と経験は、国際的にみて決して引けを取らないと感じる。その持っている・蓄積している情報をいかに世界に発信していくかが重要である。このとき重要な要素となるのが言語である。この研修では、通訳の方が終始対応してくださった。このことに対して、私は非常に感謝している。講義の内容を英語で話されると、いくら専門としている内容であっても、その全てを把握・理解することは難しい。ましてや専門外のことであれば、理解することは不可能に近い。ここで、多少正確性に欠けたとしても、通訳の方が日本語で表現してくださると、自分の理解できる部分を補ってくれることが多分にあった。質疑応答についても、英語で表現できないと質問が出来ないのか、日本語でも可能なのかによって、質問する意欲に大きな違いが出てくる。私たちの国際的視野を広げるためには、いくつかのステップが必要であろう。一週間というのはあまりにも短い。本研修の位置づけとして「会員の学術レベルの底辺を広げる・全体の底上げをする」ことに重きを置いてはどうかと考える。

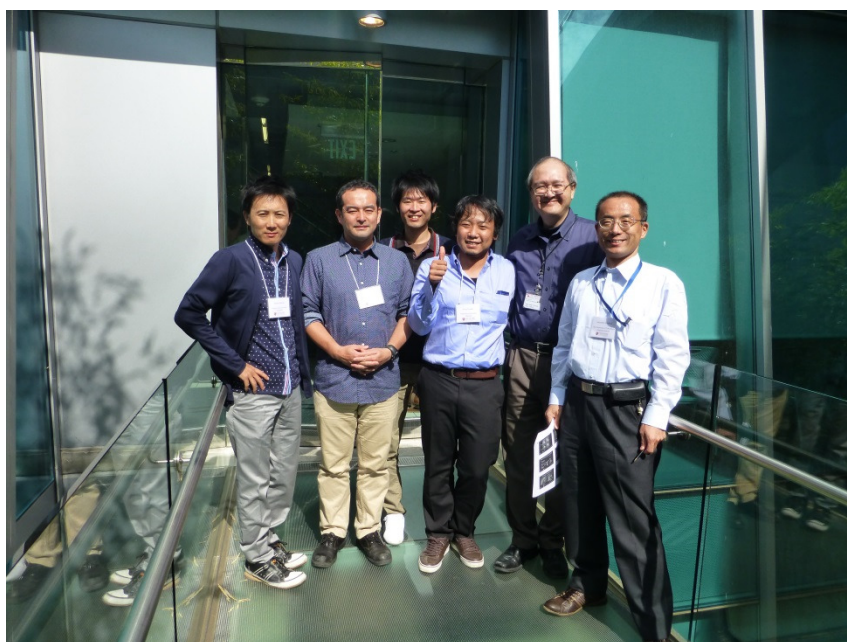
2009年10月、米国内の医療機関で発生した頭部X線CTパフュージョン検査に係わる過剰被ばくの事例について、FDA(米国食品医薬品局)が調査結果を報告した<sup>1)</sup>。このことに対して、日本の技師が対応したことは周知のとおりである。一方スタンフォード大学では、CT担当技師がこのことで危機感を覚え、彼らの要望によって、それまで配置されていなかった医学物理士がスタンフォード大学のX線CT部門においても設置されたとのこと(徳島大学病院の山田健二さんが現地の技師から得た情報)。日米の違いを考えたとき、現場での臨機応変で効果的な行動が可能な日本の制度と、それに対応できる技師のレベルに対して、私たちはもっと自信を持って良い。

本研修で得られるもう一つに「研究への取り組み方を経験する」ことが挙げられる。これを経験することは「学校を卒業してから」だけでなく、「学生のときから」でも出来ることである。ものごとを科学的・客観的に理解し、具体的な企画・計画の下、綿密な研究を実践する能力を学生が持てるように、教員として努力したい。そして、彼らが獲得した能力が世界で通用するのかどうかを見聞することも、この研修の目的の一つであって欲しい。

今まで医学物理学や画像工学の分野を研究・探索してきたが、本研修で経験したMRIに関する知識や分子イメージングに関する最先端の内容は、新たな研究の機会とそれに挑戦する意欲を高める素晴らしいきっかけを与えてくれた。この研修によって知り合った素晴らしい友人と多くのことを共有しながら、次のステップを進みたい。

Michael Moseley先生や松浦由佳先生ほかスタンフォードの皆様、GEHC-Jの方々、大変、お世話になりました。第8期メンバー、特にグループ“J”の皆さん、ご面倒をおかけいたしました。本当に楽しかったです。

佐藤英介さんは最高のリーダーでした。本当にありがとうございました。



Frandics Chan 先生とグループ J の仲間たち

参考文献のHP:

- 1) <http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm186105.htm>